

厚労科研 辻井班（発達研修開発）

1) 5. ADHDのアセスメントツール

ADHD-RS, Conners3[®], CAARS[™], CAADID[™]

愛知東邦大学人間健康学部

高柳 伸哉

注意欠如・多動症 (DSM-5)¹⁾ (Attention-Deficit / Hyperactivity Disorder; ADHD)

- 12歳以前から不注意か多動性－衝動性の症状が各6つ以上(17歳以上は5つ以上)あり、2つ以上の状況(家と学校など)で障害がみられる。

<環境の影響や関わり方の問題だけではない>

不注意

- ・綿密な注意ができない、不注意な間違いをする
 - ・注意を継続することが困難
 - ・指示に従えずやり遂げられない
 - ・活動を順序立てることが困難

多動性－衝動性

- ・手足をソワソワ動かしたりする
- ・席に着くべき場面で席を離れる
- ・不適切な状況で走り回ったり高い所へ登ったりする(成人は落ち着かない感じ)
- ・静かに遊んだり余暇活動ができない

不注意優勢型、多動性－衝動性優勢型、混合型(不注意 & 多動・衝動)

本日紹介するADHD特性のアセスメント・ツール 4点

<質問紙>

- ①ADHD-RS... 幼児～青年用。18項目。観察者評価式（家庭版、学校版）
- ②Conners 3... 児童～青年用。保護者、教師、青少年本人の質問紙3種
- ③CAARS... 成人用。自己記入式、観察者評価式

<診断・評価ツール>

- ④CAADID... 成人用。ツールを用いた半構造化面接による診断面接。

いずれのツールも単一でアセスメント・診断を行うことは推奨されず、複数の情報源が必要とされる。

①ADHD-RS (DuPaul et al., 1998) 2)

- DSM-IVの診断基準を基に不注意と多動性・衝動性の2側面を評価。
- 適用年齢(評価の対象児): 5~18歳
- 回答形式: 観察者評価式(家庭版=保護者等、学校版=教師等)
- 18項目(2因子、各9項目)、4件法の質問紙(0-3)
- 性別・年齢ごとにカットオフ値が設定

項目数が少なく、簡便なスクリーニングや支援の効果測定としても有用。

・ADHD傾向：多動・衝動HI、不注意IA、HI・IA合計

・年齢帯：5-7歳、8-10歳、11-13歳、14-18歳

・パーセンタイル：100人中におけるADHD傾向の順位
→高いほどADHD傾向が高い

ADHD-RS：家庭版
男児用スコアシートイメージ

『診断・対応のためのADHD評価スケール ADHD-RS【DSM準拠】』
(市川・田中, 2008, pp.16)²⁾

年齢帯別の下位尺度、合計得点

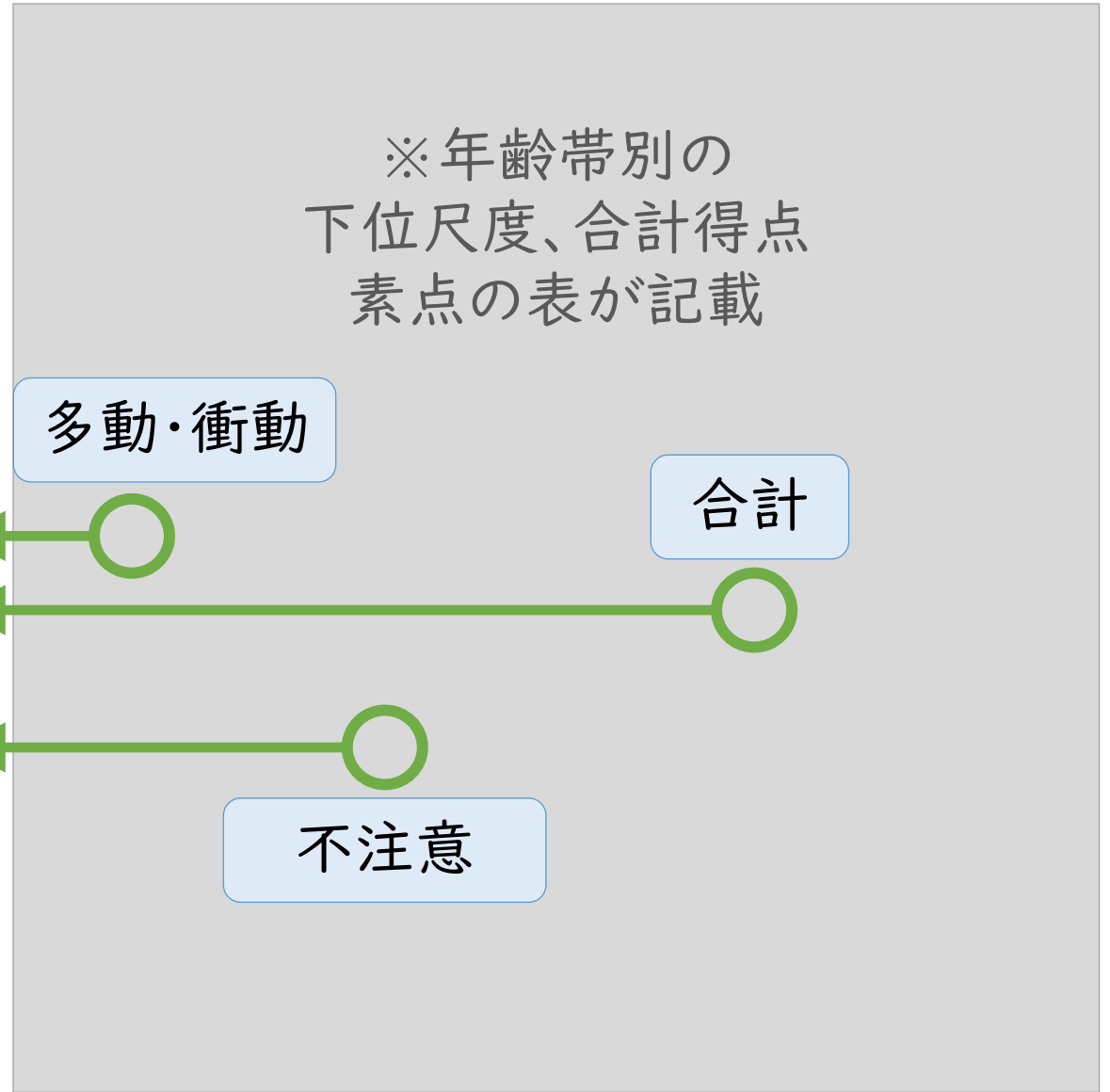
※年齢帯別の
下位尺度、合計得点
素点の表が記載

パーセンタイル数値

多動・衝動

合計

不注意



②Conners 3[®]日本語版 [DSM-5対応] (Conners, 2008/2014)^{3・4)}

- DSM-IV-TRの診断基準に対応したADHDおよびその関連問題の
アセスメント。日本語版は標準版のみ。
- 検査用紙3種 回答者(項目数)、適用年齢:
 - ①保護者用(110項目) 6~18歳 ②教師用(115項目) 6~18歳
 - ③青少年本人用(99項目) 8~18歳 いずれも4件法(0-3)
- 日本語版での採点は、検査用紙の書式に即した手計算のみ。
→ 検査用紙3種は2017年にDSM-5に対応して改変されている。

項目数が多いが、ADHD症状だけでなく素行症や
関連問題を含めた**包括的アセスメント**が可能

Conners3 結果の構成

検査用紙から転写された得点を書式に沿って計算し、採点シートに得点を記載していく。

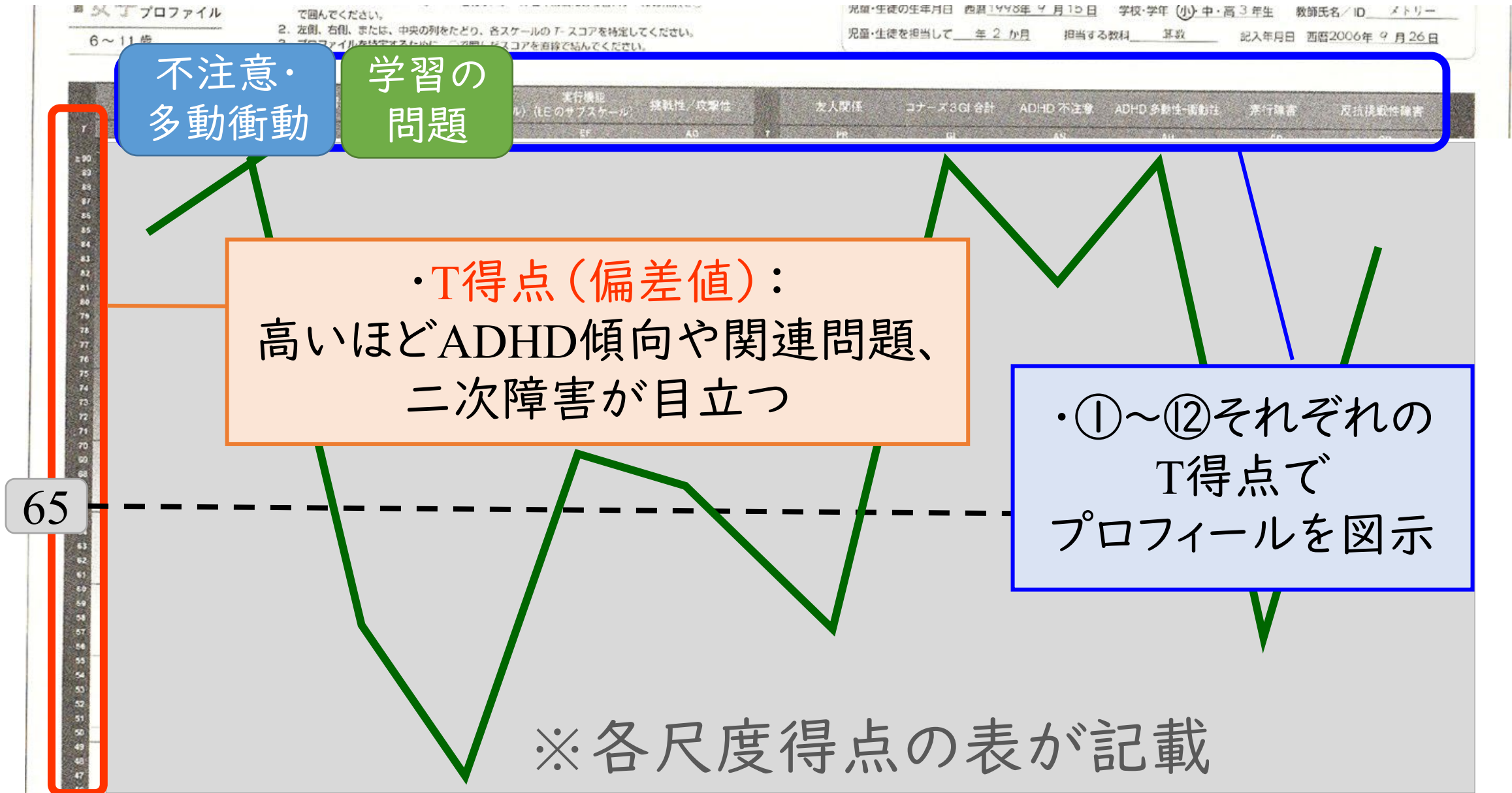
- 回答傾向： 妥当性（矛盾指標）、好印象PI・悪印象NIの評価
- ADHD症状： 不注意、多動性－衝動性症状項目のチェック
- 関連問題： 素行症（CD）、反抗挑発症（ODD）、機能障害
- コナース3ADHD指標（コナース3AI）... ADHD分類の確率を提示
- 二次障害： 不安、抑うつ、問題行為
- 偏差値によるプロフィール（T得点グラフ）：

①不注意、②多動性／衝動性、③学習の問題／実行機能（総合、個別）、④挑戦性／攻撃性、⑤友人関係、⑥コナース3GI（総合指標）、⑦ADHD不注意、⑧ADHD多動性／衝動性、⑨CD、⑩ODD、⑪双極性障害

包括的な支援計画の策定

Conners3: 教師用 プロファイル記入例

『Conners 3™日本語版マニュアル』(田中, 2011, pp.44)³⁾より



③コナーズ成人ADHD評価スケール CAARS™ (Conners et al., 1998)⁵⁾

- DSM-IVの診断基準にADHDに直接関連する症状に加え、関連症状や行動のアセスメントを行う多次元的な評価尺度
- 適用年齢：18歳以上
- 回答形式：自己評価式、観察者評価式（友人、同僚、家族など）
それぞれ66項目、9下位尺度。4件法の質問紙（0-3）
- 回答は複写式で用紙に沿った記入により、偏差値（T得点）で結果のプロフィールを容易に記述し、視覚的なグラフで状態を把握できる。
- 偏差値によるプロフィール（T得点グラフ）：
A 不注意／記憶の問題、B 多動性／落ち着きのなさ、C 衝動性／情緒不安定、D 自己概念の問題、E-G DSM-IV症状、H ADHD指標

包括的なアセスメント

来談者ID N・K 性別 男 女 (どちらかに○) 生年月日 西暦 1970年 3 月 5 日
年齢 42 歳 記入年月日 西暦 2012年 4 月 10 日 氏名 _____

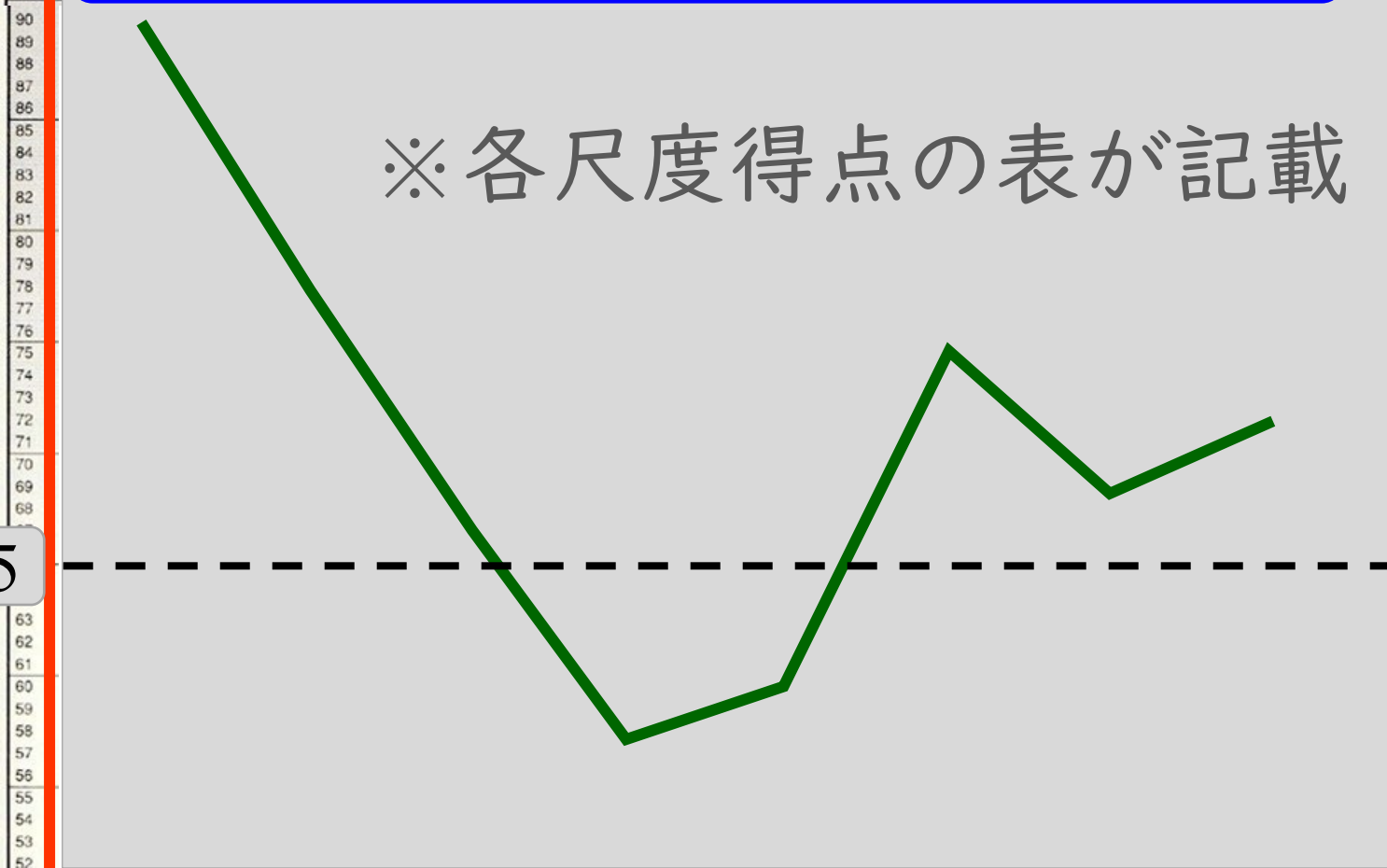
F1 = 女性 18~29歳
F2 = 女性 30~39歳
F3 = 女性 40~49歳
F4 = 女性 50歳以上

A 不注意/記憶の問題 E DSM-IV 不注意型症状
B 多動性/落ち着きのなさ F DSM-IV 多動性-衝動性型症状
C 衝動性/情緒不安定 G DSM-IV 総合ADHD症状
D 自己概念の問題 H ADHD指標

・ADHD傾向、
自己概念の問題、
DSM-IV症状

・T得点(偏差値):
高いほど症状が強い

	A ³⁵	B	C	D	E	F	G	H
T	F1, F2, F3, F4	F1, F2, F3, F4	F1, F2, F3, F4	F1, F2, F3, F4	F1, F2, F3, F4	F1, F2, F3, F4	F1, F2, F3, F4	F1, F2, F3, F4



CAARS: 自己記入用紙
スコアリング例
『CAARS™日本語版マニュアル』
(中村, 2012, pp.15)⁵⁾より

65

④コーナース成人ADHD診断面接 CAADID™ (Epstein et al., 2001) 6)

- **半構造化面接**を通じた包括的な背景情報と生育歴に基づき、**成人期・小児期両方**についてDSM-IV基準でのカテゴリー診断を提供
- **利用資格**：心理学や精神医学、社会福祉学の専門家や医師に限定
- **適用年齢**：18歳以上（本人や保護者、配偶者など複数情報源が推奨）
- **回答形式、所要時間、内容等**：
パートI・生活歴（60–90分）… 妊娠中から現在までの生育歴やADHDの危険因子（気質、発育、環境など）、小・中・高校での学習の様子、精神病歴、成人期の学歴・職歴、人間関係、既往歴、アルコールやタバコ・交通違反・事故といった併存障害など

パートIで生育環境、社会適応、心身の問題など
包括的な情報収集を行う

CAADID (つづき) パートII半構造化面接

- 回答形式、所要時間、内容等:

パートII・診断基準(約60分)... 検査用冊子の手順に沿って、定められた質問項目と臨床水準の評価を行い、DSM-IVのADHD基準A~Dに該当するか判定する。それぞれ、成人期・小児期の双方を確認。

基準A: 各症状に関して質問し、本人の回答や具体例を記載する。

基準B: 発症年齢について、基準Aで該当した症状の初発年齢を聞く。

基準C: 学校や家庭、課外活動など症状が起こる状況を確認する。

基準D: 該当する症状による問題の程度を確認し、**障害判定**を行う。
治療・支援の進捗状況の確認にも活用できる。

→ 冊子のスコアリングに沿って記入。小児期と成人期のADHD評価を「はい・いいえ」「**不注意優勢型、多動性衝動性優勢型、混合型**」で判定

ADHDアセスメント・ツールのまとめ

幼児・児童～青年：18歳以下

ADHD-RS
18項目

不注意、多動・衝動
に特化した質問紙

Conners3
100項目前後

ADHD症状に加え、
関連問題を含めた
包括的評価が可能

成人：18歳以上

CAARS
66項目

ADHD症状に加え、
関連問題を含めた
包括的評価が可能

CAADID
診断面接ツール

生育歴・生活歴の
情報収集と
DSM-IVに沿った
ADHDの判定

観察者評価式を用いることで、福祉職員や学校教員が
対象児者の特性・状態を把握・評価し、支援につなげられる。

医療機関で活用。
情報提供者として
関わりうる。

引用文献

- 1) American Psychiatric Association. (2013). Diagnostic and statistical manual of mental disorders, 5th ed. Arlington: American Psychiatric Publishing. (高橋三郎・大野 裕 (監訳) (2014). DSM-5精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- 2) DuPaul, G. J., Power, T. J., Anastopoulos, A. D., & Reid, R. (1998). ADHD Rating Scale - IV: Checklists, Norms, and Clinical Interpretation. New York: Guilford Publications. (市川宏伸・田中康夫 (監修) 坂本 律 (訳) (2008). 診断・対応のためのADHD評価スケール ADHD-RS【DSM準拠】 明石書店)
- 3) Conners, C. K. (2008). Conners 3rd edition manual. New York: Multi-Health Systems, Inc. (田中康雄 (監訳) 坂本 律 (訳) (2011). Conners 3™日本語版マニュアル 金子書房)
- 4) Conners, C. K. (2014). Conners 3rd edition DSM-5 update supplement. New York: Multi-Health Systems, Inc. (田中康雄 (監訳) (2017). Conners 3®日本語版マニュアル補足ガイドDSM5対応への改変事項 金子書房)
- 5) Conners, C. K., Erhardt, D., & Sparrow, E. (1998). Conners' Adult ADHD Rating Scales (CAARS). New York: Multi-Health Systems, Inc. (中村和彦 (監修) 染木史緒・大西将史 (監訳) (2012). CAARS™日本語版マニュアル 金子書房)
- 6) Epstein, J., Johnson, D. E., & Conners, C. K. (2001). Conners' Adult ADHD Diagnostic Interview for DSM-IV™ (CAADID™). New York: Multi-Health Systems, Inc. (中村和彦 (監修) 染木史緒・大西将史 (監訳) (2012). CAADID™日本語版マニュアル 金子書房)